

# ふみの会 ニュース

- 発行 ふみの会広報部
- 発行日 2007年4月6日
- 連絡先 藤川博樹  
〒115-0045  
東京都北区赤羽 1-48-3-203  
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
- 編集 中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直  
<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

## No.303

### 4月行事日程

#### ■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ  
ワード・一太郎文書も可  
kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ：5枚（2000字）  
小説：10枚（4000字）目安

#### ■締め切り

2007年4月22日（日）

#### ■購読料・年会費

1200円（年）

（切手80円×15枚）

郵便振替：東京 00170-1-18290



受賞作『コマーシャル・タイム』の一場面

蒲原直樹さん

アスキー ショートムービー・コンテスト

「フラッシュムービー部門」受賞

◆同人で「ふみの会」サイトのトップアニメーションを作った蒲原直樹さん（ペンネーム 白 六郎）がアスキー主催「ショートムービーコンテスト」の「フラッシュムービー部門」で受賞しました。『週刊アスキー』四月十日号（三月二十七日発行）に掲載されています。あまり文学とは関係ないことですが、楽しいことなのでお知らせします。直樹さんは柏市の公式サイト「参画eye」でパソコン講座を開いていて、そこでフラッシュ講座を作るために必死でフラッシュを勉強したそうです。その成果がこの受賞というわけ。◆フラッシュといってもどんなソフトなのか分からない人も多いでしょう。インターネット上で公開されている動画のほとんどがこのソフトで作られています。しかしこれを極めるのはなかなか難しく、五十歳を過ぎた直樹さんが勉強するのは大変だったことでしょう。そういう意味でこの受賞は快挙です。

#### 藤川博樹さんの新刊

◆汐文社でネット問題を扱った書籍をたくさん作っている藤川さんが新刊を出しました。子どもをネット犯罪から守るノウハウを詳述しています。

■四月になりましたので、年会費二〇〇円の振込をお願いします。



## 法師町坊主通り

蒲原直樹

渾沌市の文化財というのには最も古くて平安末期のものだ。丸子市に近い犀岩寺にある観音像がそれで、重要文化財に指定されている。他にはせいぜい鎌倉期のもや室町期のものが数点あるくらいで、ほとんどが江戸期でも後半のものばかりだ。建築物も同じで、かいわいで最も古い寺というやはり古い宿場町、杉戸市の呑龍寺ということになる。

渾沌市北部にある山法師町というのはこの呑龍寺の荘園があったところで、修行僧たちが合宿しつつ農業にいそしんでいたらしい。今ではその呑龍荘園はあとかたもなく、ただの寂れた商店街があるばかりだ。しかし坊主通りと呼ばれる一角にはなぜか坊さんの姿が多かった。彼らがトレーナーにジーンズで町をぶらつく姿はまさしくスキンヘッド集団だった。しかし時には墨衣を着て托鉢したりするので、やはり修行僧だろうと思うしかなかった。そしてなぜか夏になると坊主の数が一気に増

え、通りは坊主だらけになるのだ。

定食屋や赤提灯も坊主だらけ、ゲームセンターもブルーバーも大小の坊主頭がひしめく。通りを歩けばあつちで坊主が立小便をし、こつちで坊主同士が殴り合いのケンカをしている。いつもは無人のボロアパートも、開け放たれた窓から夕涼みをしている坊主やギターを弾く坊主が頭を覗かせる。いつもは閑古鳥が鳴いている古い銭湯などは朝から晩まで坊主たちが出入りして大繁盛になるのだった。

こうした坊主たちの生活騒音はかなりのものだが、さらにものすごいのは朝晩の読経の声だった。決まって早朝七時、うなるような轟音が通りに鳴り渡る。しかも通りの東西南北ではお経の内容が異なり、不協和音となって聞くものの耳に不快に響く。週末休日となってもそれは同じで、せつかくの朝寝が突然中断させられる住民の不快感はそのとうののだった。

「ねえ、あの声、なんとかなんないの？」

商店街のはずれ、小さな木造住宅で小学六年生の平栗綾香は母親に言った。それでなくとも冷房のない部屋は寝苦しいのに、やっとうとうとした所をたたき起こされるのだから毎日寝不足で、夏休み前の授業で居眠りばかりしていたのだ。

「お父さんが町内会の会長さんに文句言ったんだけど、相手にされなかったんだって。『平栗さん越してきたばっかりだから驚いただろうけど、しばらくすれば慣れますよ』だって。あの人は坊さんたちのおかげで儲かっているから、ちっとも迷惑だと思っ

てないのね」  
母親が洗濯物をたたみながらそう応えると、綾香は口を尖らせた。  
「ママたちの部屋は冷房あるからいいよ、私の部屋にも冷房つけて、窓閉められるようにしてよ」  
少女がそう言っても、

「あなたが遅くまでゲームばっかり

しているからいけないのよ、夜はさつさと寝て、早起きなさい」と逆襲されてしまった。

(こうなったら坊さんたちに直接抗議するまでだ)

綾香は決心した。

さてそう決心はして表に出たものの、どこから手をつけていいものかさっぱり分からない。綾香は話のわりそうな坊主を探すが、表通りをうろついているのは青い頭の若い坊主しかない。仕方なく綾香はその一人に尋ねることに決めた。そしてあらかじめ考えていた言葉を使った。「あのー、一番えらい坊さんって、誰ですか？」

その瞬間、あたりの空気が凍りついた。

笑いながらそばを歩いていた集団は足を止め、ゲームで遊び興じていた坊主たちも動きをやめ、こちらを見上げた。彼らは若い坊さんの言葉を緊張して待っているように見えた。綾香にはそれがなぜだか分から

なかった。若い坊主は周囲をぐるりと見回すと、姿勢を正して応えた。

「それはわが、真言宗の開祖、弘法大師空海禪師様でございます」

次の一瞬、周りの空気が電気を帯びて火花を散らすように見えた。怒りとも嘆きともつかぬ唸り声が上がると、悲鳴に似た高い声もどこかで響いた。歩行中の坊さんたちが気色ばんで割って入って来た。

「ちよつと待て、なにが禪師さまだ、法華宗の開祖日蓮上人を忘れてもらっちゃこまる」

「そうだ、日蓮さまこそ仏様のつぎに尊いお方だ」

そこへゲーセンで遊んでいた集団が飛び込んできた。

「わいら、なに言うてけつかんねん、偉い坊さんいうたらうちとこの親鸞さんに決まっとるやないか、お東さんなめたらあかんで！」

「せやせや、親鸞さんほど偉い坊さんなんかほかにおるかいな」

そこへコンビニから出てきた集団が加わった。

「やかましい、この外道ども、伝教大師最澄様をないがしろにする気か！」

ふみの会ニュース(3)

「日本で最も偉い僧侶は弘法大師空

海和尚以外にいるわけなからう」

最初の若い坊主も怒鳴り返し、通りはたちまち怒号飛び交う大混乱になった。綾香は忘れられてしまい、ぼかんとその騒ぎを見ていた。

(わたしはただ、このへんで一番えらいお坊さんのことを聞きたかっただけなのに……)

その騒動は夜になってもおさまらなかつた。むしろ争いがエスカレーターしているらしく、あちこちでものを投げる音や、棒で殴りあう音が響いた。夜が明ける頃に少し静まったように見えたが、日が昇る頃にはまた騒がしくなってきた。

「どうしたんだろうね？」

出勤前の父親が不思議そうに言ったが、綾香は黙っていた。

「なんだか、お坊さんたちの間で大喧嘩になっているそうよ……今まではこんなことなかったそうなのに、不思議ねえ？」

母親は綾香の態度を不審そうに見ていたが、まさか自分の娘が抗争の原因になっているとは考えもしなかつたろう。

坊主通りには前よりもっと坊主が増えた。どうやら宗派ごとに大動員がかかっているらしく、全国から若

い僧たちが集まって来たのだ。彼らは一様に血走った目をしており、手に錫杖や薙刀のようなものを抱えていた。そして夜になるとあちこちで衝突を繰り返しているのだった。

時にはなかなか小競り合いが収まらず、大勢怪我人が出て救急車が何度も通りを往復したこともあった。不思議なことに警察はまったくこの抗争に介入していないようで、通りでは一人の警官も見なかつた。

綾香が夜中、商店街を駆け抜ける物音に目が覚めて窓から見下ろすと、僧兵の格好をした大坊主が馬に乗って走っていた。遠くの空が赤く染まり、消防車のサイレンが響いていた。

坊さんたちの抗争が拡大している最中に夏休みが始まり、綾香は父親の田舎の青森へ出かけた。最初は坊主通りの争いが気になっていた綾香も、青森のお爺ちゃんお婆ちゃんや従兄弟たちと海や山へ出かけているうちにいつの間にか忘れてしまった。

そして真つ黒に日焼けして帰宅した八月の終わり、野々田線宿河台駅を出て坊主通りに入ると、驚くべき風景が広がっていた。通りは石ころやレンガやコンクリートブロックで埋

まり、両側の商店はどこどころ焼け焦げ、路地にはバリケードが積まれている。

(いったいどんな闘いがあつたんだろう?)

綾香は石ころを避けながら通りを歩いていった。商店街が終わり、自宅が無事なのを見てほつとした。不思議なことにあれほどいた坊主たちが一人も見えなかつた。夏が終わり、秋風が吹くと坊主たちは陽炎のように消えてしまったのだ。

「ただいまー」

綾香が玄関のドアを開けると「おかえりなさい」と母親が嬉しそうに応えた。

「あんた今日帰ってよかったわよ、昨日でやつと大騒ぎが終わったから」

「そうなんだ……」

綾香は安心するのとともに悲しいような寂しいような妙な気分になった。そして部屋の窓から通りを眺めながら、

(また夏になったら坊さんたち、集まってくるかなあ)  
と思った。

## 小説・一人ぼっち



内田幸彦

## (十八) 出張旅行

集荷をせねば売れないし、集まったところで、これと決まった売り先もない。ちびちび集まる有機肥料も駅の貨物ホームに百俵ちかく貯まってきた。運送会社からは、

「何処へ何時積むんですか？」

と、再々電話で請求してくる。早急に貨物ホームを空けないと次から置いてもらえなくなる上、資金的に詰まっている。

彦一の売っている有機肥料というのは、茶の葉のような綿花の殻(から)と葉っぱの混合されたもので、湿気を含むと発熱する。その熱を温床の温度を上げるのに用い、作物を早く生育させる。発酵した後は上質の有機肥料となり、地味を肥やす。この葉っぱがオツポ粉から出るところから、「オツポ粉」と呼ばれ、各農

家に愛用されてきた。

人の噂では、岡山県の柿・桃の果樹、高知県の砂浜や島根県の弓ヶ浜の蔬菜地帯などに需要があるというが、行こうにも旅費がない。仲の良かった友人の一人に青物問屋がいた。恥を忍んで、彼に旅費を頼むと、商売が大きい上、現金の出入りにも慣れていたので、快く八万円を貸してくれた。普通の人はこうは行かない。二の足を踏まれ、断られる。

まず、岡山県へ行った。尻に火の点(つ)いたような生まれで初めての出張旅行だった。駅の電話帳で問屋と農協を調べて廻ったが、どちらも、

「昔は使ってたらしいんですが、今はいい化学肥料があるんでねえ……」

と、話に乗ってこなかった。これで

は見込みはない。

ややもすれば減入る気持ち奮い立たせ、四国に渡って高知県足摺岬近くの農・漁兼業の村へ行った。畑で仕事をしている農夫にオツポ粉のことを話し掛けると、

「そんなの知らんなあ。聞いたこともねえ」

と仕事の手を休めず冷たく言い、こちらを向きもしなかった。不安が失望に変わったが、このまま帰る訳にはゆかない。駄目でも予定の土地だけは廻らなないと、と必死だった。意地になって次の予定地——濃尾半島へ廻った。今日で四日目だが、早(はや)旅費は底が見え、ゆっくりしてはいられない。

夜行列車を使い、宿代を節約し、昼飯を抜いて濃尾平野へ向かった。移りゆく車窓の景色を見てみると、

急に胸が迫り涙が出た。《何故、自分

ばかりが辛い目に遭う？ 俺がそれ程、悪い事をしただろうか……》

これは経験してみないと判らないだろうが、物を売りに行くことには屈辱感が伴う。物乞いしているような錯覚を覚えるのだ。人によっては物貰いが来たような冷たい目で見られる。

これで駅にある肥料が売れなければ、最初で最後の商売も駄目になる。

「あいつ、また遊んでいる！ あいつに商売なんて出来るものか……」と世間は冷笑するに違いない。そうになると、もう生まれ故郷の岸和田にはいられない……。目は涙で潤み、車窓の景色はぼやけて見えた。《俺はこれからどうなる？》

岐阜で汽車を降り、駅に備え付けの電話帳で農協と問屋を調べて数軒廻ることにした。間もなく師走であ

る。濃尾の野は空（から）つ風に吹き荒れ、彦一は吹き散らされる木の葉のように歩いた。足先が冷え、他人の足で歩いていくようだった。行き先を尋ねようにも、尋ねる人影もない。《どうせ売れないのだから廻らずに帰ってやろうか？》と、何度か思ったが、それでは悔いが残る。

やつと間屋一軒、農協二軒を廻ったが、濃尾平野では綿粉（わたこ）と呼び、知っていたものの、岐阜県と同じように、時期的に早いと言われた。

「春の二、三月にもう一度来てみたら？」

というのが共通の返事だった。全然見込みがないというよりはマシだが、駅出しの肥料はそれまで置いてくれないし、底積みになっている肥料が腐ってくる。資金的にも場所的にもこちらが待てない。彦一最後の決戦も矢張り負けらしい。この世には神も仏もないものか？

もう不安どころでなく、本当に自

暴自棄（やけ）になってきた。《もう帰ってしまえ！》と思ったが、夜行列車まで時間が余る。映画を見ようにも、やけ酒を呑もうにも、お金がない。どうせ駄目だろうと思いつながら、地図では余り遠くない愛知県丹陽農協へ足を延ばした。

丹陽農協も、

「時期的に早いから二、三月に来てみたら」と、それまで同様の返事だった。



「では、その節によるしくお願いします」

と言って農協を出たが、上（うわ）の空で、再度来る気はなかった。

借金した出張旅費も底をつき、大阪までの切符を買うと、南海本線の

難波から岸和田駅までの電車賃はなかった。難波駅で待っていたら、誰か知った人が来るだろうと、暗澹とした気持ちで夜行列車に乗った。お金がないので夕食は抜きだった。腹が減り、目を瞑っても眠れなかった。

《なるようになれッ！ やれることは全部やった。悔いはない……》

彦一は眠りたかった。それだけだった。もう商売など、どうでも良くなってきた……。

### (十八) 夜明け

出張から帰っても、お先真っ暗で働く気がしなかった。駅の滞貨の肥料が売れないのに、新たに仕入れられない。五俵でも十俵でも増えれば

増えるだけ金を払わねばならず、或いは腐って捨てることになりかねないのだ。母は彦一の顔色を見ただけでどんな状況か判るのか、何も聞かず黙々と針を運んでいる。

床にもぐり込み、悶々とするだけ

で、何も考えられなかった。最後には、《どうにでもなれッ》と、蒲団をかぶってしまった日が三、四日も続いている。倒産は目前に迫っている。債権者からどんな罵声を浴びせられるか——そんな悪い想像ばかりが彦一を苦しめた。

五日目の午後である。

「彦一、こんな手紙が入ってるわ。丹陽農協さんで知ってるの？」

丹陽農協は最後に廻った、愛知県でも大手の農協である。でも、この間の話では、「来年春にもう一度来てみたら？」と、気の遠くなるような話だった。それにしても、早過ぎる

が……、何の用だろうか？

兎に角、半信半疑で封筒を開いてみた。

——前略。先日は態々お越し頂き

恐縮しております。扱（さて）御来駕の節は夏物野菜の温床用で春頃に再度御連絡をと申し上げましたが、今回は新種野菜を研究、新商品の開

發をと考えてをります。兎に角、貨車一台分を早急に御送付賜り度くお願い申し上げます。出貨と同時に請求書に振込銀行を併記されお送り下さい。

彦一は夢ではないかと目を見張った。やつと陽が差した思いだった。

大型車なら二百俵は積むから、あと数十俵は大急ぎで集めねばならない。駅出しの肥料が金になる上に、積んでしまえば、また持ち込める。一時的にしろ、ピンチは脱した。

「お母さん、注文が入った。仕入れに行つて来るッ！」と、脱兎の如く家を飛び出した。

この貨車を出してしまえば新しく仕入れられるし、また駅のホームに積んで置ける。加減してゆつくり集荷すれば春には売れるに違いない。自分にも一条の光明が差してきた。

「よしッ！ がんばるぞッ」

彦一は水を得た魚のように、仕入れに得意先を駆けずり廻った。

そんな時、同業者の一人が教えてくれた。

「外田さん、中本綿業の営業部長さんが、あんたのことを褒めてましたよ。『あの人はお金は無いが、言った日には必ず払う人だ。これからは一寸応援しましょうかな』って言つてましたよ」

その話が耳に入った頃から、以前ほどの店も五俵以上売つてくれることはなかったのに、二、三十俵から五十俵もまとめて売つてくれる店が急に増えてきた。やつと彦一は信用を得たのである。彦一は天下を取つたような気がした。周囲の人も商品も、何もかも明るく輝いて見えてきた。商売がやつと軌道に乗つたと改めて自信を持つことが出来た。世の中も世間の人も皆、好意的に思えてきた。《今にみてるッ！ 今まで俺を冷たい眼で見た奴らを見返してやるッ！》彦一の闘志は燃え上がるのだった。

独立してから、麻雀をする暇も、

金も無く、彦一はメンバーから遠ざかっていたが、麻雀のメンバーの一人に年を取つた燃糸（よりのいと）業者が一人いた。女工さん数人の小さな事業家で、黒沢さんといった。

「商売は上手くいつてるかい？」

「いえ、それが……」

「だろうな。商売の世界は金が力だ。

若い君には金が無い。したがって、商売も思うようにゆかない。だが、金は無くても君の努力次第で信用は得られるものだ。信用というのは妙なもので、一旦信用されると何十倍、何百倍でも売つてくれる妙味がある。どうすれば信用がつくか？ それは自分で考えるのだな」

と、黒沢さんは教えてくれた。

彦一は心に決めた。支払いは言つた日に必ず払う事、約束は大きな約束より小さな約束を必ず守る事、約束の時間を守る事、出来ないことは冗談にも言わない事、などから重点的に実行することにした。それがやつと実を結んだらしい。

だが、彦一には経験がない。資金もない。年が若く、信用も今ひとつ。

その将来は決して平坦ではなかった。

(つづく)



# 春

## 中井 豊

今年も、もう春といつてよいだろう。とはいえ、五月下旬の暖かい日があったかと思うと、一週間以上にわたって真冬なみの寒い日が続いたりする。暖かい日は意欲が湧くが、寒くなると途端に元気がなくなる。実に、我儘な暮らしは天候に左右されるのである。

桜の「開花予想」が計算違いだった、と先日ニュースで気象庁の人が頭を下げていた。なるほど桜に関する催しで生計を立てている人達にとつては困ったことだろう。それにしても、「開花予想」などというものは「株価予想」「競馬予想」と同様で、そもそも税金を使ってやる仕事ではあるまい。すべてが予想どおりであれば、生きてゆく楽しみがなくなるというものだ。

ふみの会ニュース(7)

寒い日が続いたお陰で、まだ庭の白木蓮の花が綺麗に咲いている。三〇年ほど前に家を新築した翌春、一メートルにもならない苗を庭に植えたのが五、六メートルの高さに育ち、その二百個ほどの花が風に揺られてい

る。植えたまま剪定せずにおいたなら、丈が二、三倍になり、電線に引っかかって困ったことになったに違いない。

白木蓮は「白蓮」とも言い、中国原産。辛夷(こぶし)の台木に接ぎ木して売られている。辛夷もモクレン科だろう。この苗を買ったのは、春の初めに夢幻のような花を一杯につけるのが好きだったからで、将来は家のシンボル・ツリーになると思つて植えたのである。

毎年、春一番が吹く頃に決まって白木蓮の花が咲く。咲き始めは、ちょうど両方の手の平を合わせたように、おずおずとした風情である。そして、蓮に似た形に開く。午前中に開き始め、午後うちに開いてしまうこともある。一本の木のほとんどの花が短期間に静かに咲く。しかし、草花のように競って咲く気配がないからよい。花が大きいので、夜はちよつと不気味である。開いた花は折からの強風にあおられて数日のうちに落ちる。池に咲く蓮の花はもつと長くもつのではあるまいか。日射し

によつて花の開閉するのが楽しい。

同じ木蓮でも更紗木蓮は花もちがよいようだ。しかし、なぜか私は白い花が好きである。これは百合に似てもそうで、色のあるものは上等な気がしない。蜜柑の白い花も好きな花である。かといつて、全ての花が白だとしたら、楽しくないどころか、苦しいに違いない。

間もなく、木蓮の花は散る。そして暖かくなる。黄緑の葉が生え、どんどん大きくなって夏になる。葉は秋になると全部落ちる。

桜は木蓮より遅れて咲く。同時に咲くこともない訳ではないが、大抵の年は木蓮の方が早い。ひと口に桜といつても、染井吉野などと違つて、「山桜」はかなり早く咲き、木蓮より更に早い。

ところで、「染井吉野」というのは、何のことだろう。『大図典』(一九八五年、講談社)で「サクラ」の項を開けてみると、

——幕末に江戸染井村の植木屋が作出し、明治以降普及した品種(染井吉野)ばかりがサクラという観があるが、本当はたいへん多彩な花木なのである。

とある。「吉野」の説明はないが、

これは桜の異名だろう。

ちなみに、同じ項には、

——バラ科サクラ属サクラ亜属の日本原産花木。……万葉集には梅一〇四首に対し、サクラの歌は三八首しか詠われていないのである。それが古今集ではたちまち一〇〇首をこえ、……

とも記されている。

まだ冬のままの雪山から下り、里山に入るとすっかり春で辛夷の花が満開——そんな経験を登山で味わうことのできる人は幸せである。しかし、それは大自然の中でのこと。暖かく晴れた日、青い空を背景に細い梢で小鳥の群のように揺れる庭の白木蓮の花で満足することにしよう。こちらは野趣に乏しい分だけ艶っぽく感じられる。花びらは肉質でほかに甘い香りがする。

春に咲く花は、希望に溢れているようで、満開の中にあつても希望のはかなさを包んでいる。ずいぶん長くなった陽を受けて、白木蓮の花は眩(まばゆ)く恥ずかしい過去のようだ。

## おむすび！



蒲原ユミ子

タツタツタツ

小さな萌は、若草が芽ぶきだした小道をうつむいて走っていた。

さつき、マリちゃんとユキオちゃんにいわれたことで、頭がいつぱいになってしまったのだ。

「あした、おべんとうもつて、どてのさくらのおはなみしよう！」

と、マリちゃんがいったら、ユキオちゃんがさんせいした。

「いいね。でも、もえちゃんはおもつてこなくていいよ。おかあさんがいないから」

そして、マリちゃんがしんせつそうにいった。

「あたし、ママにおべんとう、ふたりぶんつくつてもらうわ」

「あつ、そう・・・」

萌はそういつてわかれてきたけれど、だんだんいやな気持ちがかみあげてきたのだった。

(おかあさんがいなくても、おとうさんがつくつてくれるもん！)

萌は小さいときにお母さんがしんでしまい、おばあちゃんちで育てられた。

そのおばあちゃんもなく、今はこの山あいの小さな町でお父さんと2人ぐらし。

萌は、お母さんがいないことをいわれると、すぐくはらがたつ。

タツタツタツ  
萌は走りつづける。

けれど、走りながら、(あれ?)と思った。もう家が見えてもよさそうなのに、まわりは緑の小道がつづくばかり。萌の家はマリちゃんちからすう分しかはなれていないはずだが。

萌はあせつてひししに走った。

タツタツタツ・・・

緑の小道はつづく。  
とつぜん、目の前がひらけ、家が見えてきた。けれど、萌の家ではない。柿の木がある古い家だ。萌になつかしいきおくがよみがえった。

(おばあちゃんちだ！)  
おばあちゃんちは、歩いていけるきよりではないのに、萌はそんなことはわすれて近づいていった。

あるある、おばあちゃんの畑も。ネギや大根もうわっている。菜の花もやさし気にゆれている。

(あつ、おばあちゃんだ)  
おばあちゃんが小さな芽のでた畝の草取りをしている。萌はおばあちゃんのところへ走った。心のすみで(おばあちゃんはしんだけど)とい

つてるけど、そんなことはどうでもよかった。目の前に、おばあちゃん

がふりかえりにこにこして萌をむか

えてくれているんだもの。  
「おばあちゃん！」  
「あいよ」  
おばあちゃんは萌にわらってへんじをすると、またせつせと草取りをつづけた。おばあちゃんは一人で畑も家の仕事もしているのだから、いそがしいのだ。  
萌もしゃがんで草をむしりはじめた。おばあちゃんのそばにいるときは、いつもおばあちゃんのまねをしてきた。おばあちゃんは萌に草の取り方でもなんでもおしえてくれた。  
むしり取った草の小さな山ができた。そして、萌の前にでっかい草のかたまりがあらわれた。  
萌は、草のおやぶんみたいなそれになちようせんした。けれど、なかなかひっこぬけない。あきらめて草から手をはなした。すると、急にさつきマリちゃんたちにいわれたこと

を思いだしてしまった。

「萌は口をとがらせて、おばあちゃんにいいつけた。」

「マリちゃんとユキオちゃんたらね。あたしにおかあさんがいないから、おべんどうもつてこなくていいって、いったのよ」

「そうかい」

「おばあちゃんは草取りの手をやすめない。」

「おとうさんがちゃんをつくつてくれるのに」

「そうだね」

「おばあちゃんはずせと草を取りつづける。萌もしかたなく、また草を取ることにした。さっきの草のねつこのまわりにぼうきれを入れて土をよくどかしてから、力いっぱい引っぱった。」

「とうとう、草がぬけた。草のねつこに土がどっさりかたまつてついでいる。こんな大きい草のかたまりが取れたので、萌はいい気分になった。」

「さてと」

「おばあちゃんが立ちあがり腰をのばしてから、萌を見た。」

「おむすびでも作ってやるかね」

「やったあ！」

「おばあさんのおむすびは、超うまい。萌は両手でVサインを作った。おばあちゃんにこにこし、丸まったせなかを見せながら家に入っていた。」

「萌は縁側にこしかけた。」

「縁側から庭先や畑を見ると、なんか安心してゆつたりする。」

「すぐに、おばあちゃんが奥からでてきた。」

「さあ、お食べ」

「みそをつけただけの大きなおむすびが、皿に1このついでいる。」

「いったきまあす！」

「萌は大きな口をあけてかぶりついた。」

「なんてうまいおばあちゃんのおむすび！ みそとごはんがよく合っている。」

「うまくてうまくて、食べていくうちに萌はさっきまでのいやな気持ちがあふつとんで、とてもしあわせな気分になった。そして、あんまりいい気もちなので、食べながらねむって

しまった。」

「萌！」

「大きな声とまぶしい光に照らされ、萌は目をあけた。」

「目の前に、にゆうつと妖怪の顔がのぞいている。よく見ると、それは懐中電灯のあかりの中のお父さんだった。お父さんはぶきみな顔で、

「萌！」とさけびながら萌をだきしめてきた。」

「萌はぼうつとした頭でまわりを見たら、どうやらすっかり夜になっていた。うしろに、近所のおじさんたちも懐中電灯をもって立っている。マリちゃんやユキオちゃんのお父さんもいる。」

「心配させやがって、このつ・・・」

「お父さんは萌を抱きなおして、また、きつく抱きしめてきた。萌は息がつまるようだった。けれど、お父さんがいないのに気づき、はつとした。」

「萌はまちがって、家とはぎやくの山道をのぼってしまったようだった。」

「そして、墓地に入り、小さな墓石をまくらにして寝入っていたのだつた。」

「近所のお年よりは、「萌ちゃんはキツネに化かされたんだ」とうわさした。」

「けれど、萌は夢だったのかどうか知らないけれど、おばあちゃんに会えたし、うまいみそおむすびも食べられたので、よかつたと思った。」

「それに、もう1年生なんだから自分でもおむすびを作りはじめたんだつて。」



## 街中の似顔絵師(九)

瀧本 文彦

日曜日の上野駅は混雑していたが、平日の通勤ラッシュ時の生存競争の血走った混雑とはちがいの、のどかな

雰囲気があった。しかも春爛漫である。僕の心はブギウギピアノであった。十二時に五分まえだ。急がなくなつては。妙子さんが、待ち合わせの上野公園前改札口に居なかつたら如何しよう。待てど暮らせど現れなければ永遠のお別れか。僕は渋谷駅で、

それぞれの住まいに帰るために別れた時の光景を思うのであった。妙子さんは手を振った。僕も手を振り応えた。妙子さんは微笑んでいた。すつぽかすようなことはないだろう。妙子さんは早めに改札口に着き僕を待っているに違いない。ブギウギピアノの僕はその様に思い急ぐのだった。改札口に近づくとき妙子さんが居た。僕の心はラグタイムピアノになつたりスイングピアノになつたりブギウギピアノになつたり忙しかった。

「又お待たせしましたね」  
「今来たばかりですよ」  
「重そうなバッグですね」

「ええ、ニコンの一眼レフカメラを持って来ました、望遠レンズも持ってきましたから」

僕はカメラの趣味は持っていないが、妙子さんの持っているカメラに興味を持った。上野公園に向かつて歩いた。

「カバンを持ちましょうか」

「いいですよ。これくらいのカバンを重いと思つては生きていけませんよ」

「あ、そうですか……そうですね」

桜の木に向かった。桜の花はほとんど散つてしまつていたが、まだ散るまいぞと枝にしがみついて、地球の重力に逆らつて抵抗している花があらちろちらに見られた。妙子さんはカバンからニコンの一眼レフカメラを取り出した。僕は高級カメラだと思つた。カメラにほとんどと言つていいほど興味を持ったことは無く、一眼レフカメラを手に持つたこともなかつた。

僕が初めて手にしたカメラは、中学校の修学旅行に行った時に、大阪

のデパートで買った、手のひらにちよこんと乗る小型のおもちやのようなカメラだった。フィルムは小型のカメラに合わせた幅の狭いものだった。白黒写真だった。其のカメラで撮つた写真が田舎の実家にある。今では其の写真を見ない。初めて其のモノクロ写真を見て、自分の立っている背景の壁のぼろいのに目を逸らしたくなつた。あの当時の難民の小屋のような家に劣等感を感じ其の写真を見たくないのである。

当時の手のひらにちよこんと乗るサイズのおもちやのようなカメラで撮つた写真は写りが良くなかつた。其れでも板切れを継ぎ接ぎした壁は、

はつきり見えた。ところで不思議なことに、平成十九年の今日では、僕の修学旅行の時買ったあのカメラは重宝な物のようで、カメラ店に飾られている。売れば十数万円で売れる

そうだ。実家でそのカメラを探してみたが見つからなかつた。どこに行つてしまつたのだろう。

妙子さんは、ほとんど散つてしま

つている桜の木に近づいた。カバンから接写レンズを取り出し、散るまいぞと頑張っている花びらに近づいた。はらはらと桜の花の散る姿に、幽玄やら潔ぎよさやらを感じ、その桜の姿に心を打たれた歌を多く見かけるが、散り残つた桜、枝にしがみつき、なにを散るものかと頑張つている桜の心を歌つた歌人は、僕の教養の範囲では無さそうだった。

妙子さんのカメラの持ち方、かまへ方に、カメラ教室で習つた成果が現れているなと思つた。撮影する形がきまつている。シャッターの切る音が重厚がかつ歯切れのよい気持ちのいい音だった。

「写真の撮り方がきまつていますね。シャッターの音がいいなあ。僕に其のカメラをちよつと貸していただけませんか。」

「いいですよ。どうぞ。」  
僕はそのカメラを持った。手にずしりと重い。ニコンのFAというカメラだった。(つづく)

# 青い波濤と白い龍

## 第十回

藤川博樹

### ■結婚・メンデルスゾーン

常三は、望月が大田綾子と結婚すると聞いて意外だった。綾子は前の執行委員の橋本とつきあっていたので、その間柄はみんな知っていたからだ。

ふみの会ニュース(11)

三月の大会で、牟田は書記長に選ばれていた。牟田は、色が黒く、悪人面をしているので、街頭で演説などしているの見栄えが悪く、大衆受けしなかった。しかし、活動家の仲間うちで以前から知っている人間には、絶対的に信頼されていた。大衆を煽動はできなかつただろうが、選挙や学園祭のときに集まった百人以上の活動家を号令し動かすことができた。講堂に集まった一般学生でなく、自らの意思であるいは上の命令で集まってきた活動家学生たちを、広い会場の空気とともに支配した。そのカリスマ性と支配力は演説を聞

いている方が圧倒され、活動家たちは無条件に牟田を信頼した。彼ならどんな分野に進んでも成功すると思われたが、上からの要請によって専従の活動家になった。いわば永遠の裏方として歴史の波に飲み込まれた。

同志よ固く結べ 生死をともにせん  
如何なる迫害にも あくまで屈せず  
我等若き兵士 プロレタリアの

牟田たちは祝賀会や慰労会の後、肩を組んでいつもこの歌をうたった。牟田にはインターナショナルの歌より、この歌が似つかわしかった。都学連執行委員の事務所に電話がかかってきて、書記長席の牟田がとつた。相手は橋本だった。同じ大出身の以前の友人である。「おれも聞いたときは驚いたよ。お前の気持ちはよく分かる。しかし、綾子さんの気持ちは尊重してやらな

いとな

橋本は納得し、気持ちも収まった。牟田には話を聞いてもらうだけで相手を納得させてしまうような何かがあった。それは、政治的・心理的なテクニクだけではない何かであろう。牟田としても以前の友人と、現在の同僚である書記次長である望月のどちらの肩も持つわけにはいかないのである。

常三は望月の結婚式に招かれた。メンデルスゾーンの真夏の夜の夢から、結婚行進曲が鳴り響き、二人が入場した。

望月の同じ大学の昔からの活動家仲間からお祝いの言葉が述べられた。

「そのころはまだ、フォンヒエン論文が出ていなかったの、望月君も一緒に女子寮に入り込んでオルグの会議を開き、そのまま泊り込むことも一度や二度ではありませんでした」

というところで失笑がおこった。フォンヒエン論文は、ベトナム共産党の機関紙に発表され有名になった論文で、「頹廢との闘争はアメリカ帝國主義との戦いの重要課題」というものだった。この論文が有名になり、共産党からテレビ番組への頹廢批判などがさかんに行われた。

新郎新婦への質問コーナーがあった。常三は、会場を盛り上げようとして上野と質問を考えた。

「ファーストキスはいつですか」  
「もちろん、結婚式当日の夜です」

望月が、間髪を入れず答えたので、この質問は笑いを取った。望月は頭の回転が速く、その語りは情熱的でガンダムに熱中する少年のようところがあつた。

音楽が、ファンファアレの部分に達すると、古川や寺崎などともに示し合わせて、常三たちは会場に突進し、望月の胴上げが始まった。新郎は意外だったのか嬉しかったのか一瞬引きつった笑い顔で胴上げされた。

メンデルスゾーンの騒がない音楽はそのときの会場の雰囲気にとびつたりとマッチした。

# 紙芝居名作館

その3

蒲原雅人

「おににさらわれたあね」

■作者・水谷章三 絵・須々木淳  
■制作・発行 童心社

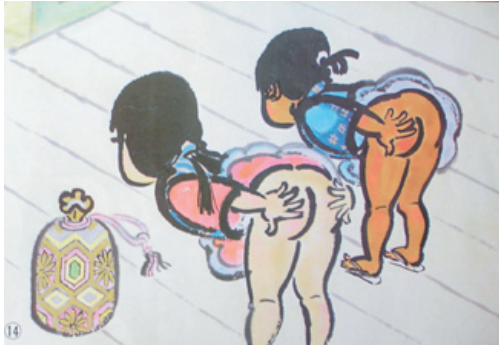


■子供たちはパレ話が好きで、うち、おしっこ、おしり、おちんちんの類いの話は「しんちゃん」の世界ではないが、底辺がひろい。この作品は題材にも関わらずじつに上品に仕上がっており、文を担当した水谷氏のおなえる詩情がおだやかに漂っている。絵の須々木氏もこれによくこたえており、下の場面なんかは出



色のできたろう。

■このおしりぺんぺんによって鬼は



おおわらいして、追跡に失敗。姉と弟は鬼の宝とともに人里へ帰ることができる。とにかく子供たちにおおうけする場面である。こういうおおらかさは、児童ポルノなどの氾濫する現代には貴重だ。

「バーコーのかいぶつたいじ」

■作者・八木田宣子 絵・織茂恭子



■制作・発行 童心社

■ベトナムの民話をもとに脚色されたもの。まず、すばらしい絵に惹き付けられる。東南アジアの熱気を伝えてあますところが無い。

■この画家はあきらかにベトナム戦



争時の民衆の抵抗戦を念頭においた造型をはかっており、それは主人公の躍動に顕著だ。  
■ところで、この話のなかには日本

